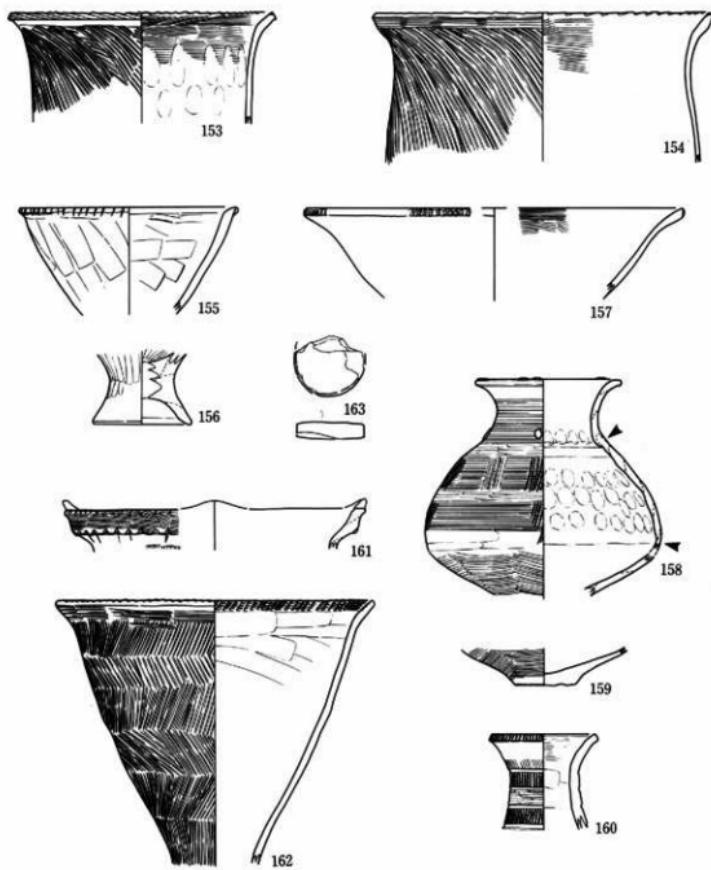


第55図 SB56出土土器 (2)



第56図 SB56出土土器 (3)

径はもう少し小さくなるかもしれない。

158・159はB系統壺。同一個体の可能性が高い。158は形態的にA系統に接近するので、折衷型と考える。縦位直線は沈線と櫛の交互施紋。床面直上で潰れた状態で出土した。159は底部にドーナツ状のくぼみを持つ。底部成形はbか。

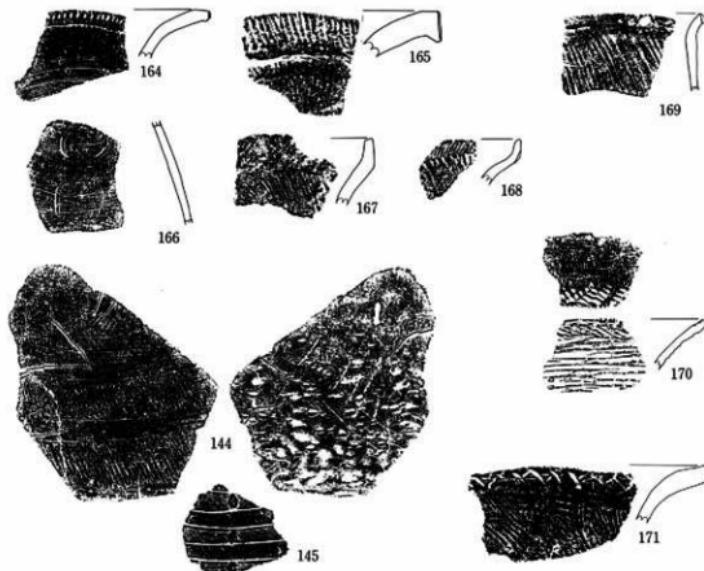
160はCa系統の二枚貝刺突紋系壺である。細頸であるが、体部と頸部の境界が明瞭かどうかは不明。どちらでも有り得る。

161は有段波状口縁甕。162は深鉢 Cb。口縁部内面の櫛刺突紋は押し引き状である。

164は櫛描紋系の太頸壺 A。165は無紋系か箆櫛併用紋系の太頸壺 A。166は付加沈線の欠落した櫛 I 種 A 頭の単帶櫛描紋。縦位弧線は櫛 I 種 A 頭。

167・168は繩紋系細頸壺 Aa。

170は深鉢 Cb。171は要D。口唇部に斜格子紋。169は甕 Ad。



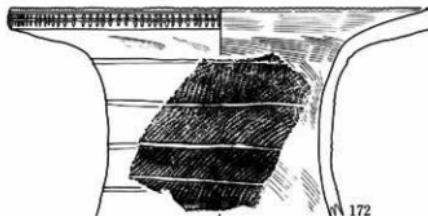
第57図 SB56出土土器 (4)

SB59 172は縄紋をもつ太頸壺A。口唇部は沈線を施した後に板による割みを加える。上端にも刻みがある。頸部は縄紋の後に沈線を4条施す。黄褐色。

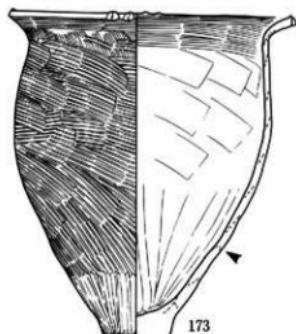
173は壺Ac。口唇部は2ヶ一対の部分圧痕を円周4分割の位置に施す。体部はハケメ→二枚貝→下部に研磨の順で調整する。

174は壺Ad。体部径が口縁部径を凌駕する。体部中位やや下部に成形単位のつなぎ部分が明瞭に認められる。

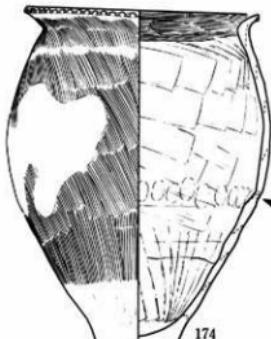
175はB系統壺。頸部はやや細身で長頸と言ったほうがよい。櫛描紋帶部分は櫛II種b類による直線紋のあと縦位に櫛II種b類と沈線による交互施紋が施される。口縁部外面には幅の広い沈線によるハネアゲ紋、体部上半には沈線による連弧紋が施される。典型的である。



172

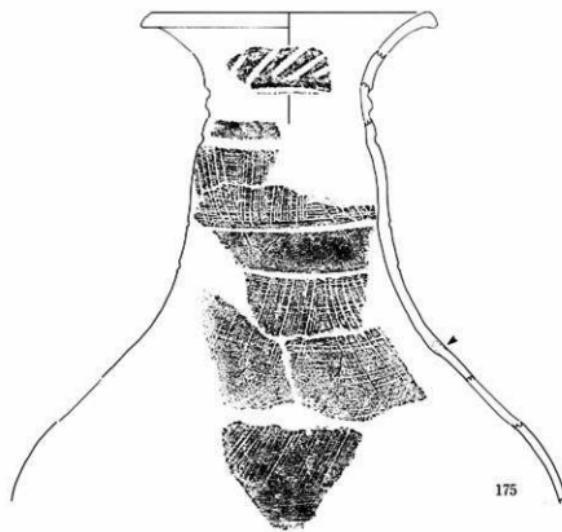


173



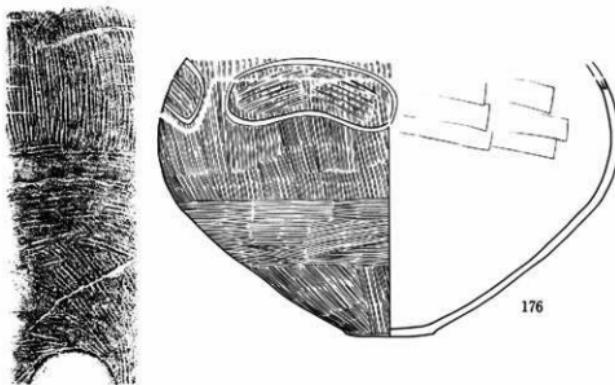
174

第58図 SB59出土土器 (1)



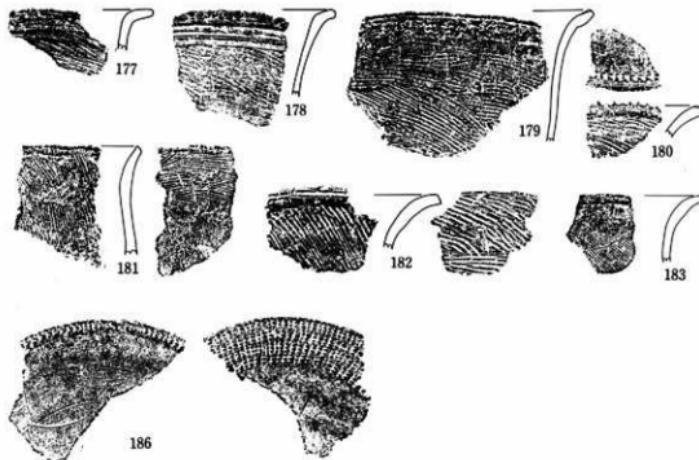
第59図 SB59出土土器（2）

S B 66 176はC系統壺。体部は二枚貝調整で、その後に二枚貝による連弧紋を施し、それを沈線で囲む（連環状弧紋）。底部はやや突出気味で座りが悪い。

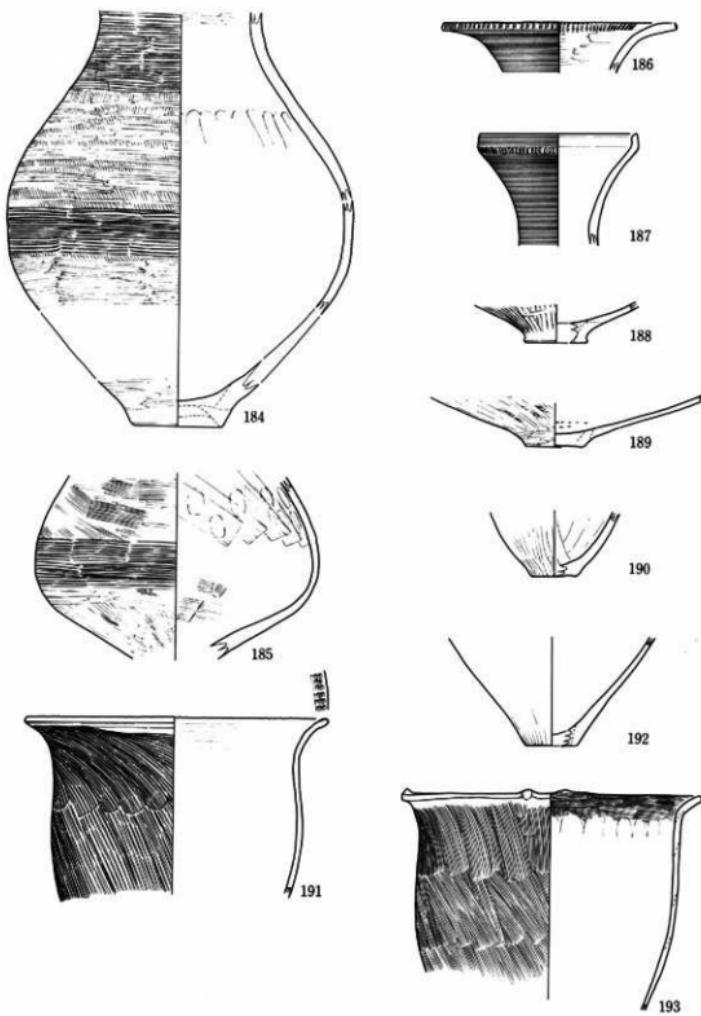


第60図 SB66出土土器（拓図1：4）

- SK73 第62図左列184・185・191が最下部から出土した。右列はそれより上部からの出土。  
 177・178は甕Aa 1。口唇部には円周4分割の位置に単独圧痕が施されるはずである。  
 179・180は甕Aa 2。口唇部上端は二枚貝刺み。181は甕Ad。182は深鉢Ca。体部外面、  
 口唇部、口縁部内面すべて二枚貝調整・施紋である。183は甕Ad。  
 184・185は0期壺。二枚貝直線紋（二枚貝腹縁の弧状静止質を残さない直線紋）の頸・体部2帯  
 構成で典型的な朝日式壺である。接合しても完全にはならない。混入であろう。  
 186は口縁部内面に二枚貝刺突紋を施す太頸壺A。口唇部にも二枚貝刺み。頸部柳描紋は  
 口縁部にまで及びⅠ期の典型であることがわかる。黒色仕上げ。187は細頸壺Aa。口縁部  
 扉曲部には板？によるD字刻み（→方向）。黒色仕上げ。188は研磨を加えない突出した底部。  
 成形はbか。189は丁寧な研磨を施す底部。外面は二枚貝調整の後に研磨が加えられる。底  
 部成形aか。底部内面には擦痕がある。黒色仕上げ。折衷型。  
 190は鉢。全面研磨。黒色仕上げ。  
 191は甕Aa 2。口唇部上端は二枚貝刺み（→方向）。192は体部下半と底部外面に丁寧な  
 研磨を施した底部。193は甕Ad。口唇部には円周4分割の位置に指頭による単独圧痕。



第61図 SK73出土土器 (1)



第62図 SK73出土土器 (2)

S K74 SB19に切られる土坑である。内部は炭化物と土器片が密に充満していた。接合の結果、完全になるもの多かった点は、他の土坑と大きく異なる点である。土器廃棄用の土坑といった趣である。

194は0期大形壺。頸部直線紋は二枚貝腹縁の静止痕が特徴的に観察できる。口縁部は二枚貝施紋の後、上下に指頭圧痕を加える。口縁部内面には二枚貝背面で直線紋を3条施す。

195は頸部に二枚貝直線紋を施す太頸壺A。口縁部はやや垂下し、口唇部には板？で刻みを施す。196は頸部部界にハケメ工具によって段を作る。頸部櫛描紋は細密な櫛I種A類。色調は茶褐色。体部の研磨は雑である。

197は細頸壺 Aa(櫛描紋 b類：復帝4段)。直線紋は櫛I種a類で縦位弧線は3・3・3の梯III種。体部内面は擦痕が顕著である。198は無頸壺。口縁部施紋は磨滅しているが波状紋のようである。

199は櫛II種b類の櫛描紋を施す太頸壺である。調整は体部下半をみると限では二枚貝調整である。施紋は頸部から体部にかけて横型流水紋。口縁部内面は流水紋の構図がくずれ、扇形紋で分割した直線紋帯を縦位の直線で分割している。口縁部の外周には2本1対の刺突紋があげぐる。主紋様単位は櫛描紋からなるが、構成は明らかに大地形壺と関係がある。折衷型である。黒色仕上げ。

200はB系統細頸壺。口縁部内面には3ヶ1単位の圧痕が円周4分割の位置に施される。櫛描紋は櫛II種b類。黒色仕上げ。

201は系統不明の受口状口縁壺である。口縁部屈曲部上下の波状紋はどちらもハケメ工具で施されている。調整・施紋を同一工具で行う要Dと同じ系統の壺かもしれない。茶褐色。

202は口縁部に突起をつくる壺である。復元では円周4分割の位置にあるが、3分割かもしれない。

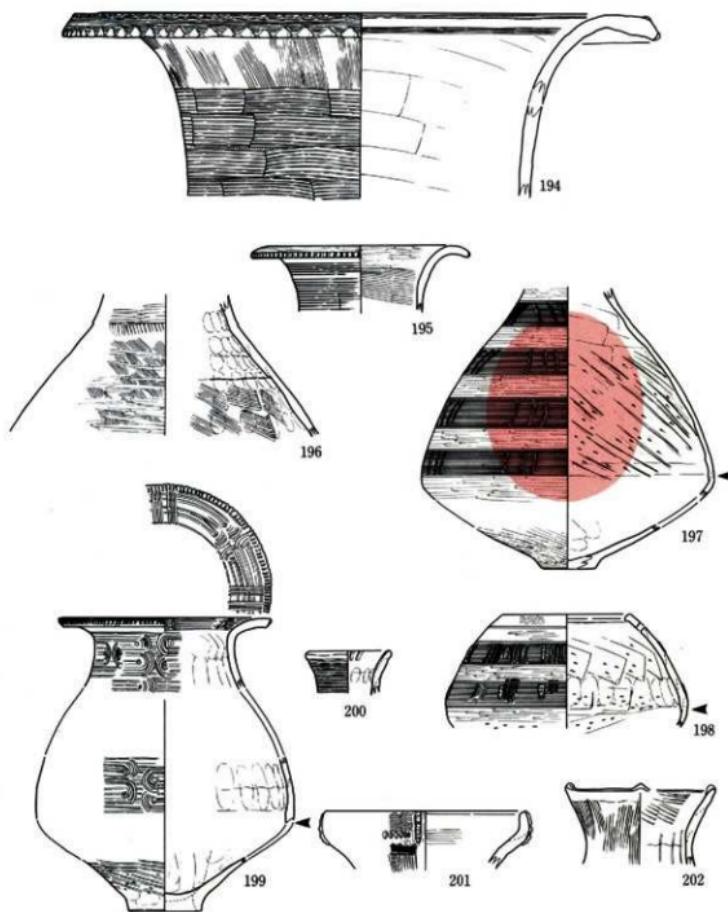
203は壺Ab。I-1b期ではただ1点である。204は壺Aa。体部下半部の調整はハケメではなく二枚貝である。205-208は壺Ad。口縁部径>体部径、口縁部径≥体部径などある。規格による定形化は認められない。206・207の底部成形はc。

209は鉢の脚台か土製品。210は高杯脚部で杯部には研磨が施されている。

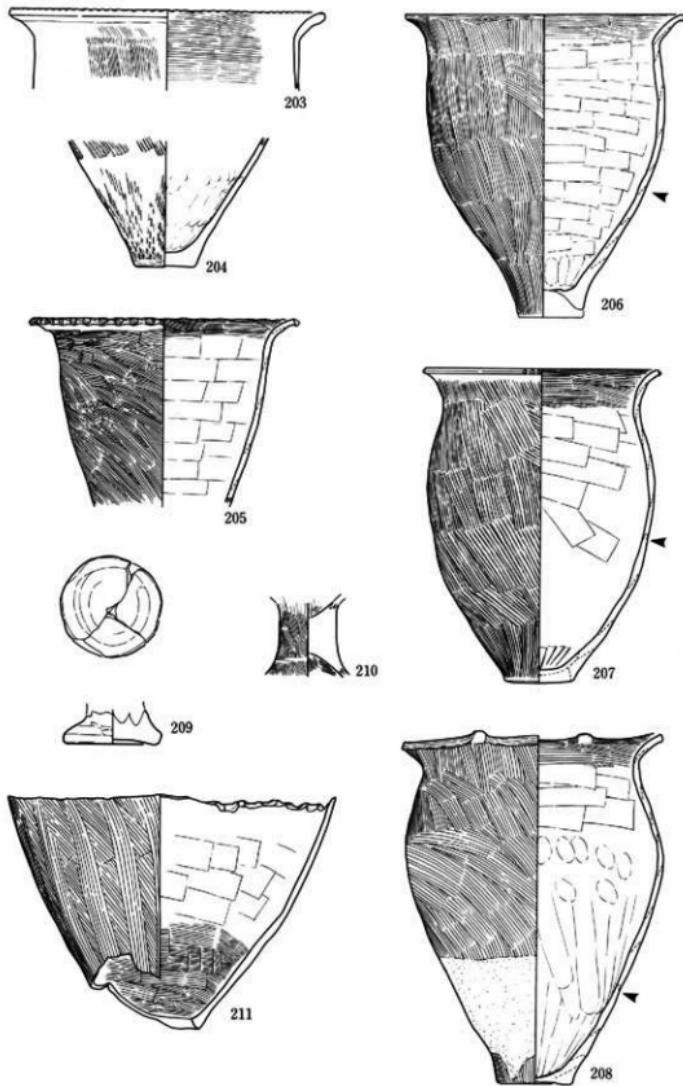
211は体部上半が意図的に打ち欠かれ、下部も抜かれた壺Ad。

212・213は太頸壺B。212は、口縁部外面に斜格子紋が施され、B系統としては珍しい。頸部紋様は、櫛II種b類による直線紋が整っている。縦位は上段が沈線4条による鋸歯紋、下段が櫛II種b類と沈線による交互施紋である。体部上半の連弧紋はそれぞれ→方向のものが←方向に施される。213は、口縁部外面に通有の幅広いハネアゲ紋。頸部の隆起部分は沈線の斜線。下部の櫛描紋は断続施紋で各単位の端は切り合う。体部上半の連弧紋はそれぞれ→方向のものが→方向に施される。この212と213は、前者がよりA系統土器に傾斜しているとすれば、後者はまだ統一窓紋系土器に近いことができる。

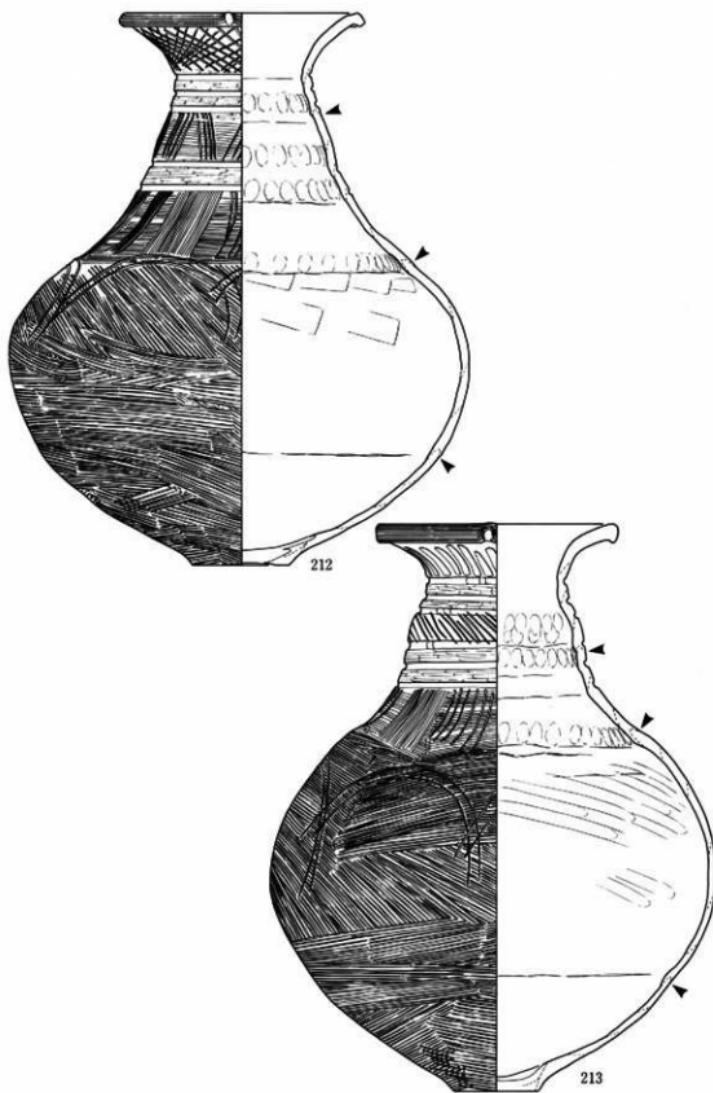
214は箆描併用紋系の太頸壺A。215は同一個体ではないが、このような感じになる。口縁部は強いヨコナデが加えられる。口唇部の施紋は沈線を2条施した後に、ハケメ工具で



第63圖 SK74出土土器 (1)



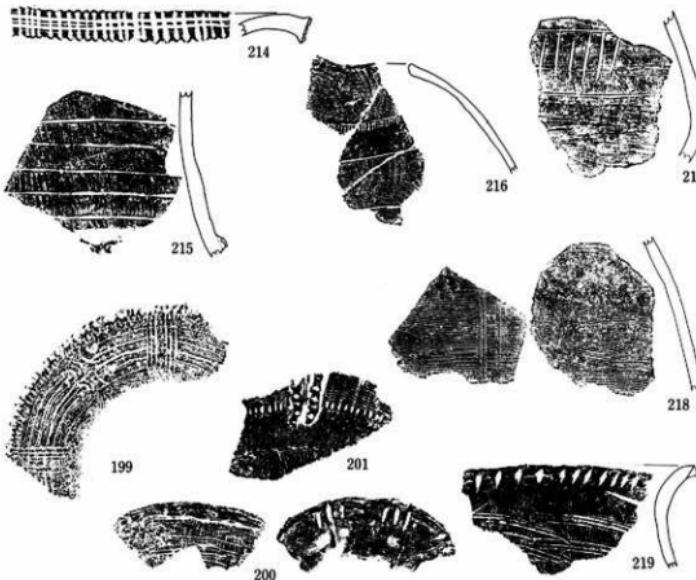
第64図 SK74出土土器 (2)



第65図 SK74出土土器 (3)

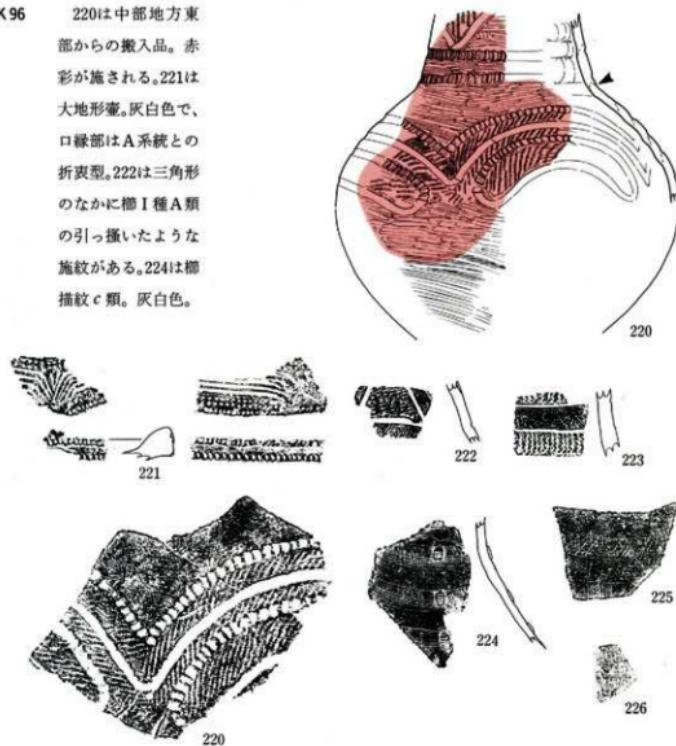
刻む。215は頸部下端に突帯を持つ。216は無頸壺A。櫛描紋上段は複帶波状紋、下段は複帶直線紋。縦位弧線は $(2 \cdot 2 \cdot 2) \times 2$ の櫛III種。217は櫛描紋d類。櫛I種A類。218は4帯以上の複帶からなる櫛描紋a類。原体は櫛II種b類。

219は壺 Ac。



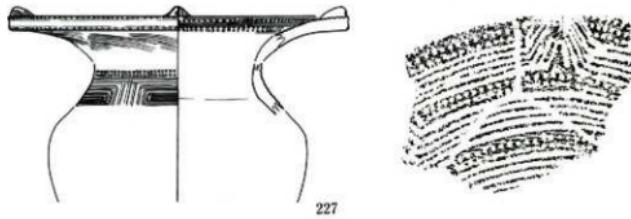
第66図 SK74出土土器 (4)

SK96 220は中部地方東部からの搬入品。赤彩が施される。221は大地形壺。灰白色で、口縁部はA系統との折衷型。222は三角形のなかに櫛I種A類の引っ搔いたような施紋がある。224は櫛描紋c類。灰白色。



第67図 SK96出土土器

SK107 227は221と酷似するが接合関係はSK106のほうにある。灰白色。A系統に接近。折衷型。



第68図 SK107出土土器

SK140 SB30に切られる土坑内部からの出土である。

228は太頸壺A。頸部の縦描紋(櫛II種b類)は整った構成を見せず、単位も短く断続的で上下に插れており、一見雑な印象を受ける。これを「下手」といえばそれまでだが、細頸壺などにもまま見受けられるので、一つの手法として独立していると考えたほうが良いようにも思う。明るい灰色。

229は頸部に刻み突帯をもつ縞紋系太頸壺A。

230はB系統壺。Iは連弧紋が施されている。櫛II種b類の直線紋を縦位の沈線で区切っている。赤褐色。

231はC系統か。極めて彫刻的な施紋である。部位は体部中央であろうか。黄褐色。

232は口唇部が外傾するだけでなく直交する刻みが施され、C系統壺の手法と関係がある。C系統の縞紋系壺であろうか。

233~240は壺底部である。成形はaがほとんどだが、他に235や240のような粘土盤の据え置き(底部成形d)がある。これは古い様相で0期に多い特徴である。底部内面がやや凹面をなすのは成形aの特徴である。

241~244(232も?)は縞条痕紋系土器の組成を示す好資料である。

241は太頸壺Ca。頸部より上の復元に自身はあるけれども、体部上半の復元は心許無い。しかし、二枚貝条痕の上に連弧紋が施されることはあるけれども、この手法は古い様相で注目してよい。口縁部は屈曲部外面に二枚貝刺みが→方向に施される。口縁部の斜格子紋は鋭い切り込み状の沈線によって施される。灰白色。

242は太頸壺Ca。口唇部に二枚貝条痕が施される。頸部はおそらく二枚貝条痕後にナデ消される。灰白色。

243・244は深鉢Ca。体部外面、口唇部、口縁部内面に二枚貝調整・施紋が施される。243は体部の張りがやや強くなっている。

245は壺D。

246は混入。II期後半の細頸壺で頸部に隆起部が作られる折衷型。口縁部内面には爪形紋が施される。体部紋様部はかなり上半へ圧縮されている。



228



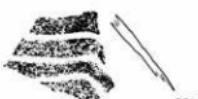
229



230-1

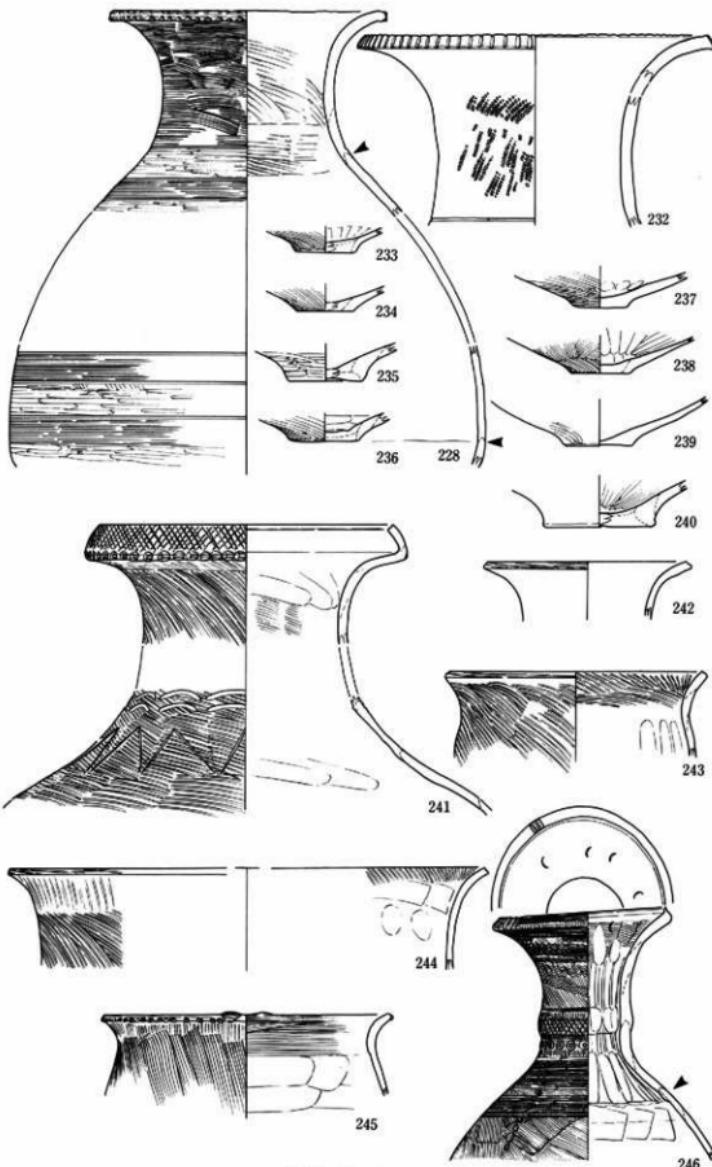


230-2



231

第69図 SK140出土土器 (I)

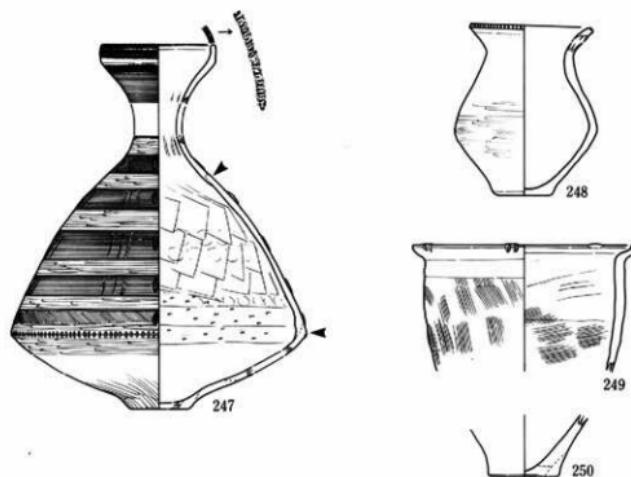


第70図 SK140出土土器 (2)

SK151 247は櫛描紋b類だが、口唇部には幅の狭い切り込み状の刻みが施される。刻みは図示した部分で「ハ」字状に傾きを変える。口縁部外面は波状紋2段、体部には櫛I種a類を原体に単・単・複・单で施される。縦位弧線は2・2・3の櫛III種である。櫛描紋帯は最下段が無施紋でハケメをそのまま残す。体部の上下境界は突帯を作らず刻みを施している。手法的には古い様相である。黒色仕上げ。

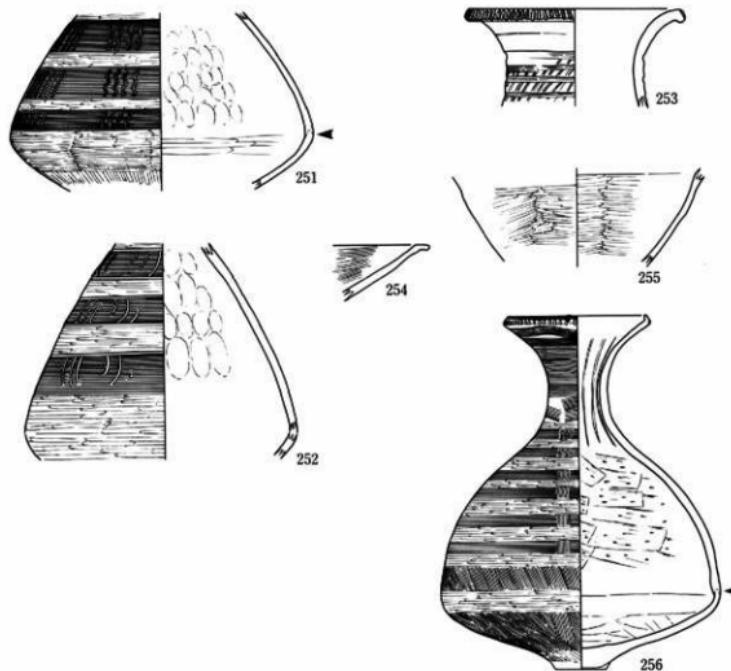
248は小形壺。体部は研磨が施される。

249は壺A d。口唇部は2ヶ一対の部分圧痕が円周4分割の位置に施される。口唇部はやや上方にそって微妙な受口をなす。250はやや上げ底の壺底部。成形はc。



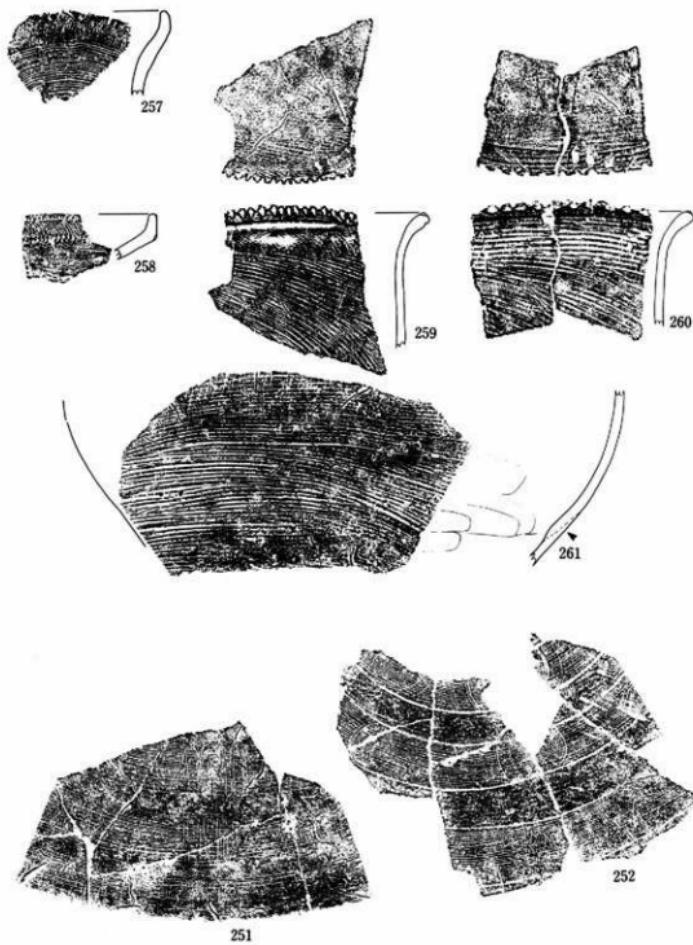
第71図 SK151出土土器

- SK181 251は櫛描紋a類。櫛II種a類で複・複・単に施される。縦位施紋は直線紋と波状紋の交互施紋で、3・3の櫛III種を3回施して1単位とする。黒色仕上げ。252は櫛描紋b類。復帶3段で、縦位弧線は2・2・2の櫛III種。だいたい縦位弧線は互い違いに向きを変えるのが普通だが、拓本では中段左端の弧線の向きが変わっていない。黒色仕上げ。
- 253はC系統の壺。頸部は地の条痕を完全に消さないままに沈線を施しており、古い様相を見る。
- 254は高杯。255は高杯か鉢。どちらにしても精製。
- 256はII期細頸壺Aaの混入。縦位弧線は櫛描直線紋施紋後に一気書きで施している。胎土には砂粒が多く含まれているので、内面の擦痕は顕著になっている。
- 257は細頸壺Aaの口縁部。口縁部には波状紋が施される。屈曲部の刻みはない。
- 258は精製の鉢。黒色仕上げ。



第72図 SK181出土土器 (I)

259・260は甕 Aa 2。259は口縁部直下に一次調整のハケメがよく観察できる。  
261はB系統甕の体部下半。



第73図 SK181出土土器 (2)